

# KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 98 号 令和 3 年（2021年）7 月 20 日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017 神戸市中央区楠町7-2-1

TEL : (078)371-3351 FAX : (078)371-5046



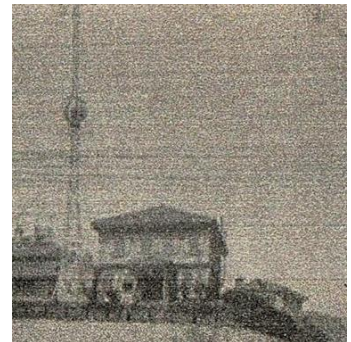
川西英の描いた二代目タイム・ボール

海岸通に、税関港務部・通信省・水上警察署の合同庁舎が建てられ、二代目となるタイム・ボールが設置されました。

川西英「タイム・ボール」(部分)『川西英の新・旧「神戸百景」』(神戸市立博物館)



二代目タイム・ボール  
神戸旧外国人居留地復元模型  
(神戸市立博物館)



最初のタイム・ボール  
絵葉書「摂津花隈城」  
(神戸市立中央図書館)



地図に示された港務部報時球 三宮停車場は現在の元町駅あたり  
『神戸築港全圖』『神戸築港問題沿革誌』(明治41年)  
黒丸○印は、最初のタイム・ボールがあったところ

## タイム・ボール—報時球—

明治三十六年、神戸と横浜で最初のタイム・ボールが作動を開始しました。これは港に停泊する船舶に正確な時刻を知らせるもので、現在のJR元町駅北西、花隈公園の位置にありました。高さ十三メートルの鉄塔の先に十五メートルの柱が続き、直径二メートルの赤い球が正午五分前になると柱の上部に上がりました。正午と同時に球が落ち、それを船で注視していた船員が確認し、船舶時計を校正しました。

球の落下にあわせて、波止場に据えた大砲をズドンと鳴らした時期があり、花隈城跡の高台は地元では「ドン山」と親しまれたといえます。かつて西灘にあった関西学院に通った稲垣足穂は、三ノ宮駅を西に向かかって発車すると右側に塔が見え、「玉つきヤグラは自分にとつて、最初のオブジェモビルであった」と、神戸の風景を回想しています。

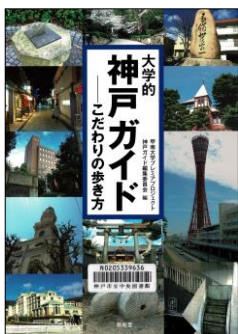
花隈のタイム・ボールはその後、大正十四年に海岸通に新築された合同庁舎のてっぺんに移り、十年あまり、無線報時に役目を譲るまで、港の風物詩の一つであり続けました。

参考：弓倉恒男「タイム・ボール」『海事資料館研究年報』23号、『神戸港』434号  
ほか

**大学的神戸ガイド—こだわりの歩き**  
方 甲南大学プレミアプロジェクト  
神戸ガイド編集委員会編（昭和堂）

神戸は幕末の開港以来、海外との交流を通じて様々な文化を育み発展してきた。その歴史と特性を人文・社会・自然科学の専門家が深く掘り下げ解説する。

第一部「六甲山と茅渚の海」では山と海に囲まれた自然環境や地域の歴史を、第二部「伝統とモダニズム」では社会的・文化的な事象を、第三部「近代とアジア」では国際関係の中でも特にアジアと神戸との関係性を取り上げている。岡本の梅、珈琲文化、スイーツ、ファッション、音楽など多岐にわたるコラムも読み応えがある。



**旗振り山と航空灯台** 柴田昭彦（ナカニシヤ出版）  
江戸から大正にかけて、大阪・

堂島での米相場は手旗信号で各地に伝達されていた。その中継地となったのが旗振り山である。

前著『旗振り山』以降に判明した旗振り山と通信ルートについての新たな考察を追加した。また、昭和初期に設置された、安全な夜間飛行のための航空灯台と、ラジオ塔の跡地に関する記事も収録する。地図や現場を訪ねるためのガイドなど図版が多くわかりやすい。

**水道筋読本—商店街と市場のある暮らし**  
（水道筋商店街協同組合）

水道筋は阪急王子公園駅東側から都賀川へと続く通りで、十の商店街と市場が連なり、買い物客で賑わっている。そんな水道筋にゆかりのある人が、住んでいる人・住んでいた人・通ってくる人、それぞれの視点で水道筋を語る。巻末に神戸在住の作家松本隆らのインタビューが収録されている。この本は水道筋読本特設サイトでも読むことができ、YouTubeの神戸西灘チャンネルでは動画が公開されている。

**がんになった緩和ケア医が語る「残り2年」の生き方、考え方** 関本剛（宝島社）

四十三歳でがんを発症し、余命数年と分かった著者が、医師と患者両方の立場から葛藤しながらも、命の終わりを迎えるまで前向きに生きようとする姿が綴られている。神戸市の病院で多くのがん患者と向き合い、看取ってきた著者の思いが読み手に伝わってくる。

がん患者ならずとも読んだ人すべてに「生きるヒント」を与えてくれる。

**希望を握りしめて—阪神淡路大震災から25年を語りあう** よろず相談室 牧秀一編（能美舎）

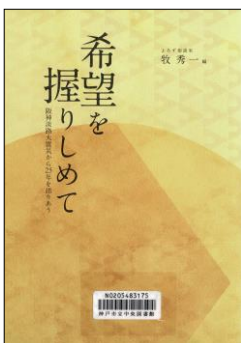
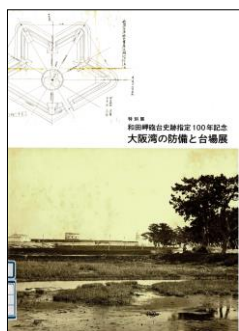
「よろず相談室」は、震災直後から避難所となった小学校で被災者支援を開始した。避難所の解消後も高齢者宅の訪問や震災で障害者となった被災者への支援を続け、東日本大震災の被災地支援のほか、震災体験を記録し、後世に伝える活動にも取り組んでいる。本書は、「よろず相談室」の歩みとともに、被災の実態とその後の人生を被災者が自分の言葉で語った証言集である。証言映像の記録DVD付き。

**大阪湾の防備と台場展—和田岬砲台史跡指定100年記念** 神戸市立博物館編集・発行

本書は、和田岬砲台の国史跡指定一〇〇年を記念し、神戸市立博物館が令和三年二月から三月に開催した特別展の展示図録である。

大砲を設置するための砲台である「台場」が、幕末に大阪湾周辺に多く築かれるに至った時代背景や経緯などが絵図や写真、古文書から解説されている。

また、昭和・平成に行われた、和田岬砲台の二回の大修理などを基に、解明されつつある台場の構造や、築造に携わった船大工・石工といった職人の具体像にも迫っている。

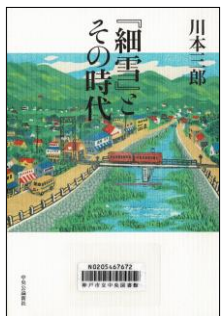




『細雪』とその時代 川本三郎 (中央公論新社)

「文学評論の楽しさとは、大きな論を語ることより、細かい註をつけてゆくことにある」そう語る著者が、谷崎潤一郎『細雪』の世界につぶさに注を付す。

作中の蔭岡家の幸子ら姉妹は芦屋で暮らし、阪急電車に乗って神戸に食事や買い物に出かける。オリエントホテルでの見合い、新開地での映画鑑賞等、エピソード一つ一つに焦点を当て、当時の写真や日記を用いて時代背景を解説し、谷崎の描写の意図を考察する。この本を読むと、幸子らが暮らす阪神間モダン都市の姿が、いっそう鮮やかに浮かび上がってくる。



声の記憶—「蝙蝠日記」2000-2020 クロニクル 島田誠 (ギャラリー島田)

かつて海文堂の社長を務めた著者が画廊通信に書き続けてきた「蝙蝠日記」が、再編集された。

島田は芸術家を支援する団体を立ち上げるなど神戸の文化活動に携わってきたが、文化人でも経済人でもない自身を鳥でも獣でもない蝙蝠に重ね、ギャラリー島田を開廊した二〇〇〇年から現在までの心の内を語る。ホームページでは日記の全文を読むことができる。

激震 西村健 (講談社)

著者のフリーライターとしての経験から生まれた小説。雑誌記者の古毛は阪神・淡路大震災の翌日の神戸で、火災の焼け跡に凜と立ち尽くす女性を見かける。彼女の深遠な光を放つ眼に衝撃を受けた古毛が足跡を追うと、彼女は震災のさなかに起きた殺人事件被害者の娘・余寿々絵であるとわかる。

阪神・淡路大震災で生き方を変えた寿々絵と地下鉄サリン事件を起こしたオウム真理教の男性信者の二人を中心に、雑誌記者の目を通して一九九五年を描いている。

==その他の新刊==

潮風のむこうには—平生釦三郎と住吉村の人々 中森敏博著 前田康三 企画制作 (みるめ書房)

いのちをめぐる物語—死ぬって、怖い? 神戸新聞社編 (神戸新聞総合出版センター)

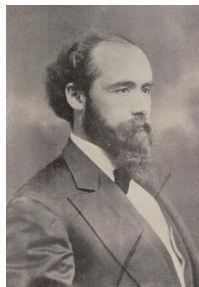
谷崎潤一郎と書物 山中剛史 (秀明大学出版会)

神戸 その22 あんな人こんな人

J. C. ベリー John Cutting Berry 弘化4年(1847年) ~ 昭和11年(1936年)

J. C. ベリーは、明治5年(1872年)に来日したアメリカ生まれの医師・宣教師です。18歳で洗礼を受けた数年後、荒れた海で難破しかけ奇跡的に助かった経験から、神の導きに従って生きることを決意しました。

医療宣教師となり日本に派遣され、神戸では生田神社前に貧民のための施療所「恵濟院」を設けるなど、布教や治療に努めました。また、日本の医療の発展にも貢献しています。当時の兵庫県令(知事)神田孝平(たかひら)に申し出て囚人の遺体を使った人体解剖を行い、治療法が確立されていなかった脚気(かっけ)の研究をしたり、神戸監獄における囚人の非人間的扱いを改めるよう進言したりしました。県内初の解剖が行われた下山手通の神戸病院は、現在の神戸大学医学部のルーツともいえる病院です。



神戸での活躍の後、ベリーは岡山や京都にも移り、約20年間にわたって日本で医療や医学教育に携わりました。大正元年(1912年)、日本政府は長年の功績を称え、勲三等瑞宝章を贈りました。

【参考文献】『ひと萌ゆる：知られざる近代兵庫の先覚者たち』神戸新聞文化生活部編(神戸新聞総合出版センター 2001)、『神戸大学医学部50年史』(神戸大学医学部 1995) 【画像】『日本に於けるベリー翁』大久保利武編(東京保護会 1929) 国立国会図書館デジタルコレクション

六甲登山架空索道

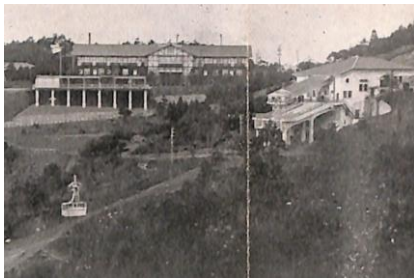
架空索道とはロープウェイのことです。戦前、今も運行している六甲ケーブルと並んで多くの乗客を山上に運んだ六甲登山架空索道がありました。戦時中の金属供出により撤去され、現存していません。

六甲山の開発は、明治中頃、英国人貿易商A・H・グルームら居留地の外国人が別荘や日本初のゴルフ場を創設したことに始まります。昭和に入ると、歩くか駕籠や馬によつていた交通手段が発達し、昭和三年に裏六甲ドライブウェイ、翌年に表六甲ドライブウェイが開通、市街地からバスが運行します。続いて、六年に阪急電鉄の六甲登山架空索道、七年に阪神電鉄の六甲ケーブルが開通し、二つの私鉄が競い合つて、交通網、ホテル、観光施設と山上にリゾート地をつくり上げていきます。

六甲登山架空索道は、全長一・六キロメートル、山麓の土橋と山上の前ヶ辻を七分で結び、



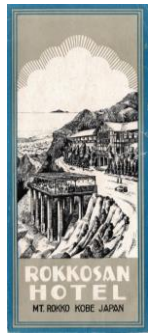
(神戸市立図書館作成)



六甲山ホテルと六甲登山架空索道山上駅 『六甲山ホテル』パンフレット(部分)

二十五人乗り、毎時六回運転する大規模なものでした。阪急・六甲駅と架空索道登り口駅との間を連絡バスが走り、人々は手軽に山上に登ることができました。開通当日の『神戸新聞』(昭和六年九月二十二日)にその乗心地が記されています。「僅か七分で頂上に達する。遙か下に谷や森をながめてスルスルと登つてゆく気持は恰も飛行船のゴンドラに乗つてゐるやうな愉快さである。開けゆく六甲……科学の威力に開発されて行く六甲はこのロープウェイの開通を一エポックとして更に目覚ましく開け、神戸、否、全關西人の樂園として祝福されることだらう。」昭和十二年には年間約二十四万人が利用し、東洋一との人気で春の休日など長蛇の列ができ、朝から待っても乗れずに駅前で弁当を開く人もあつたそうです。

ロープウェイで山上に着くと、目の前には六甲山ホテルがありました。昭和四年に阪急電鉄が宝塚ホテルの別館として開業したものです。建築家・古塚正治が設計し、外観は山荘風で当時の案内に「スイスコッター式の瀟洒な建物」とあります。客室は四十あり、並室一人一泊四円で、大半の客が避暑に一月以上滞在し、三分の一を外国人が占めたようです。ホテル前の崖に建つテラスもホテルの経営で、軽食も出され登山客も利用できる眺望のよい食堂でした。ホテルは平成十九年度に近代化産業遺産に認定されました。



『六甲山ホテル』パンフレット同上

一方、阪神電鉄は昭和二年、六甲山上の土地七十五万坪を購入し本格的な観光開発に乗り出します。六甲から有馬までの鉄道敷設免許を得ていた六甲越有馬鉄道を系列会社とし、昭和七年に六甲ケーブルを土橋から山上まで開通させます。

当初は六甲村徳井から六甲山を越えて有馬までを路面電車とケーブル(鋼索鉄道)で結ぶ計画でした。五つ設けた鋼索鉄道の区間では路面電車

を車両ごと遷車台に載せ、乗客を乗換えなしで有馬に運ぶという奇抜なものでしたが、費用が莫大で技術的にも困難なため構想に終わりました。しかし、当時、六甲山と有馬を結ぶロープウェイをつくる計画が既にできていたことが、阪神電鉄の社史『輸送奉仕の五十年』や昭和十二年に兵庫県が主催した座談会「六甲山を語る」の会議録に記されています。その後計画は財政難で中止され、実現するのは昭和四十五年の六甲有馬ロープウェイの開通を待つこととなります。

当館所蔵の資料に青焼きのロープウェイ縦断面図があります。その表題欄に、「1930」 「Aerial ropeway」 「From Mount Rokko-San to Arima」 「Rokko-ge-Arima Railway Comp.」の語が見え、一九三〇年(昭和五年)に六甲山から有馬まで旅客輸送するロープウェイの設計を六甲越有馬鉄道が発注したものと推測されます。青焼きの図面は九十年の時を経た今も色あせておらず、六甲越えの夢を伝える貴重な資料です。



表題欄

参考『日本近代の架空索道』、「座談会六甲山を語る」『公園緑地』六甲山計畫特輯号ほか



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。